

魚津市埋蔵文化財調査報告第11集

富山県魚津市  
はや つき うわ の  
**早月上野遺跡**

——第5・6次調査（範囲確認のための試掘調査）概要——

1983

魚津市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は富山県魚津市上野地区において実施した早月上野遺跡第6次調査の概要報告書である。なお、前年におこなった第5次調査の成果も合せて収録した。
2. 調査は昭和57年10月12日より同年12月27日までおこない、整理作業は昭和58年1月4日より3月31日までおこなった。
3. 調査は遺跡の範囲確認を目的とした試掘調査で、魚津市教育委員会が主体となり、国・県の補助金を得て実施した。
4. 発掘調査は、社会教育課麻柄一志が担当した。第5次調査は、麻柄と斎藤隆（現小杉町教育委員会）が担当者となっておこなった。
5. 出土遺物は魚津市立歴史民俗資料館において保管している。
6. 調査に際しては黒部市教育委員会桜井隆夫氏から種々の御教示を得ている。

## I 遺跡の位置と環境

早月上野遺跡は富山県魚津市上野・吉野地区にまたがっている。上野・吉野地区は早月川と角川に挟まれた洪積台地の最奥部に位置し、標高は65~75mを測る。上中島台地と呼ばれるこの洪積台地は両側に発達した河岸段丘を形成しており、段丘崖は角川側で約30m、早月川側で約10mの比高差となっている。台地は全体に緩く傾斜しており、遺跡の周辺は特になだらかな地形となっている。遺跡の推定範囲は、台地の東西の段丘端まで長さ約1km、幅500mに広がっている。

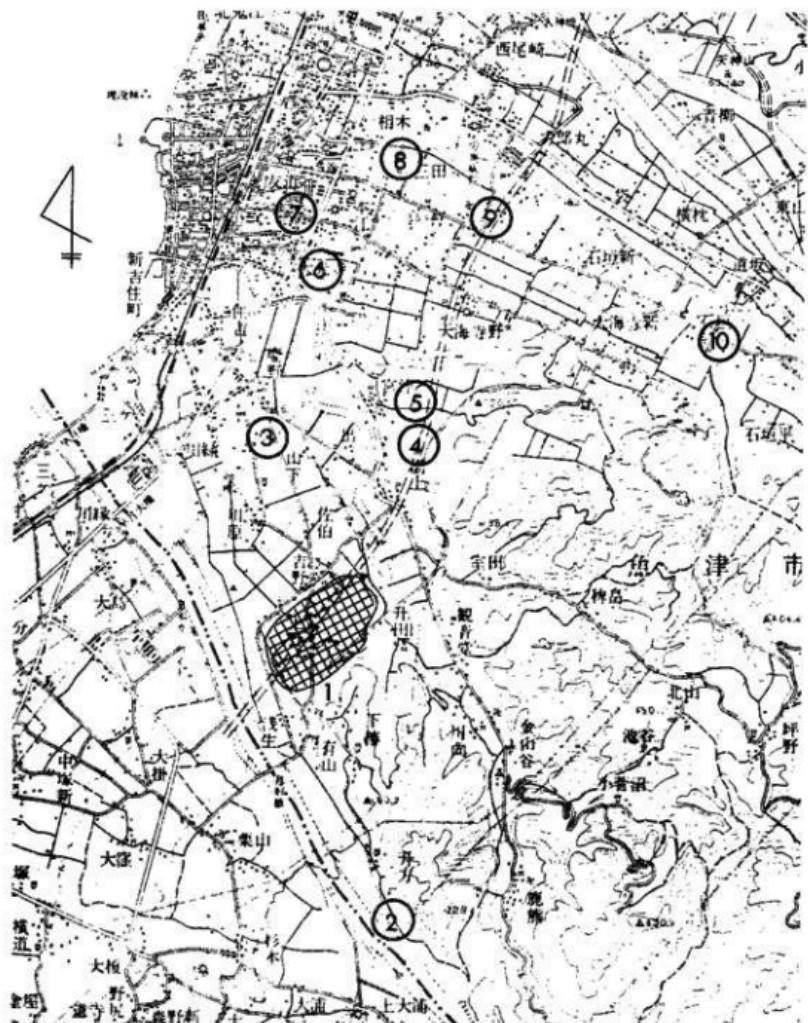
遺跡の現状は大部分が水田で、ほとんどが近世以後の開田によるものと思われる。吉野地区は1970年代に大規模な圃場整備が実施されているが、上野地区は遺跡の大部分が破壊されておらず、遺跡は良好に保存されている。

周辺の遺跡としては、同じ上中島台地上の角川に面した段丘崖近くに佐伯遺跡（第1図3）、その南に山下遺跡がある。佐伯遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭・奈良・平安時代の大規模な集落であるが、縄文早期・前期・中期・後期・晚期、弥生中期の遺物も出土している（富山県教委 1979a、1979b、魚津市教委 1981）。山下遺跡は圃場整備により大半が消滅しているが、縄文前期後葉の遺物が出土している。

早月川上流の河岸段丘上には縄文中期初頭～前葉の升方遺跡がある（第1図2）。この遺跡も圃場整備によって破壊されている。

角川を挟んだ対岸の野方台地には数多くの縄文時代の大遺跡が存在する。角川に面して大光寺遺跡（第1図6 縄文中期）、宮津遺跡（第1図5、縄文中期）が、台地中央部には本江遺跡（第1図8 縄文後・晚期）、印田遺跡（第1図9 縄文中期～晚期）、石垣跡（第1図10 縄文中期～晚期）が存在する。このほかに縄文時代に属する小遺跡は多い。魚津市は富山平野の中では、立山連峰から続く山塊が最も海岸近くにせまる地域で、山塊の裾野には広大な洪積台地がみられる。こうした自然条件が縄文時代の人遺跡を数多く出現させた要因の一つであると考えられる。早月上野遺跡は旧石器時代に始まり、縄文・弥生・奈良・平安・中世の大複合遺跡である。しかし、遺跡の中核をなすのは縄文中期～晚期である。北陸では縄文時代中期に大遺跡が数多く出現するが、それが後・晚期に続く例は少ない。魚津市内では、早月上野遺跡のほかに石垣遺跡、印田遺跡、本江遺跡など縄文中期に出現し、後・晚期に続く遺跡が存在する。北陸地方の後・晚期には、沖積地への遺跡の進出が著しいが、富山県の北東部においては、依然として中期と同様に台地上に集落を構えている例が多い。一つの地域が指摘できる。中期の集落が天神山遺跡・桜崎遺跡のように舌状台地や狭い尾根状の台地上に立地するのに対して、中期から後・晚期へ連続する集落は、台地上でも広大な平坦地に位置することが特徴としてあげられる。

弥生時代以後では上中島台地と同じように野方台地でも遺跡は減少し、弥生時代後期から古墳時代初頭の湯上B遺跡（第1図4、富山県教委 1982）、古墳時代中期の印田遺跡、古墳時代後期～奈良時代の友道遺跡が知られているにすぎない。



- 1 早月野遺跡 2 升方遺跡 3 佐伯遺跡 4 湯上遺跡 5 宮津遺跡 6 大光寺遺跡  
7 友道遺跡 8 本江遺跡 9 印田遺跡 10 石垣遺跡

第1図 早月野遺跡とその周辺 (1/50000)

## II 調査の経過と概要

### 1. 調査に至るまで

早月上野遺跡は明治35年の発見以来魚津市の代表的な縄文時代の遺跡として、広くその名が知られている。面積の広さ、旧石器時代から中世に至る期間の長さなどはこの遺跡の価値を高めるものである。

しかしながら、1970年代には純農村地帯のこの台地上にも開発の波がおとずれ、1974・75年にスーパー農道の建設のため、1979・80年には北陸自動車道の建設のため緊急調査が実施されている（富山県教委 1975、1976、魚津市教委 1982）。

1960年代から魚津市内でも大規模な圃場整備事業が実施され、縄文時代の遺跡の立地する洪積台地も例外ではなく、石垣遺跡（魚津市教委 1971）、大光寺遺跡（魚津市教委 1967）の緊急調査が実施されている。しかし、宮津遺跡、升方遺跡、早月上野遺跡の吉野地区では事前調査がおこなわれていないまま圃場整備が実施され、遺跡はほとんど消滅している。現在では魚津市内の大半の水田は圃場整備がおこなわれており、農村部で圃場整備未着手の広い水田地帯は早月上野遺跡の上野地区くらいである。

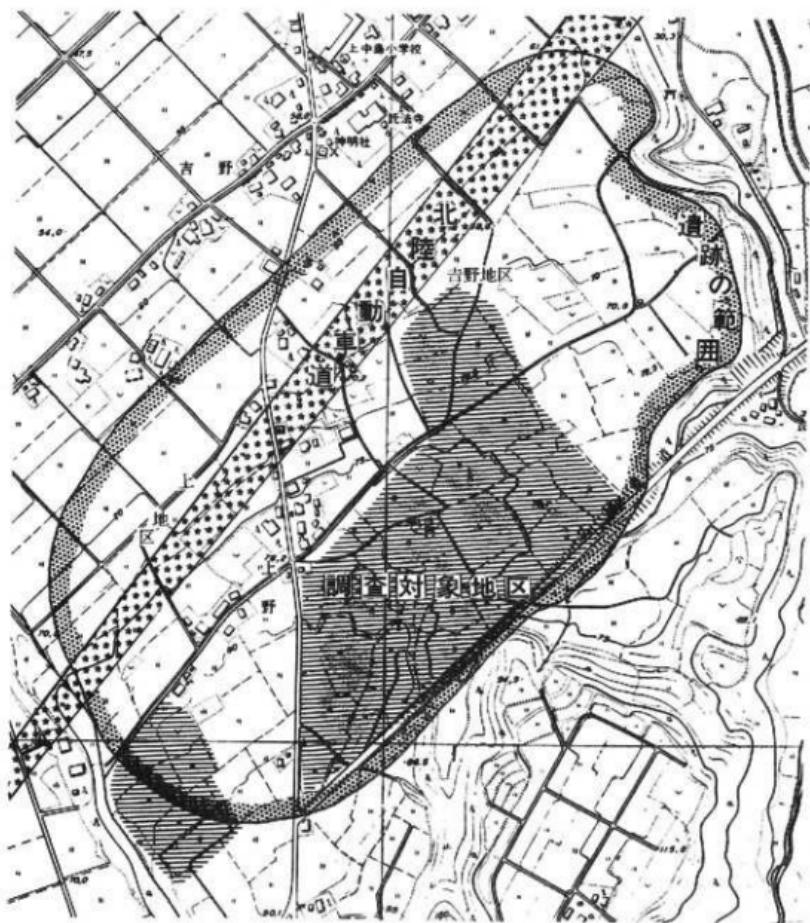
上野地区でも個人規模での圃場整備は数年前からおこなわれており、遺跡の東側は既に壊滅状態である。

昭和56年10月、上野地区で個人の圃場整備が計画されていることがわかり、市教委では10月13日～21日まで延7日間、約3000m<sup>2</sup>を対象に試掘調査をおこなった（第5次調査）。この調査の結果、縄文時代中期から晩期の良好な包含層が確認され、圃場整備の実施にあたっては何らかの保護措置を検討する必要が生じた。ところが、翌昭和57年4月、魚津市土地改良区より魚津市教育委員会に、上野地区約15万m<sup>2</sup>の団体圃場整備計画の相談があり、市教委では遺跡の全様を知るために圃場整備予定地全体の試掘調査をおこなうことになった。前年度の試掘実施地区は今回の団体圃場整備計画に含まれているため、この地区は試掘対象からはずした。

調査は遺跡の広がりと包含層の深さを把握することを目的とし、早月上野遺跡第6次調査として昭和57年10月12日から12月27日まで実施した。

### 2. 調査の概要

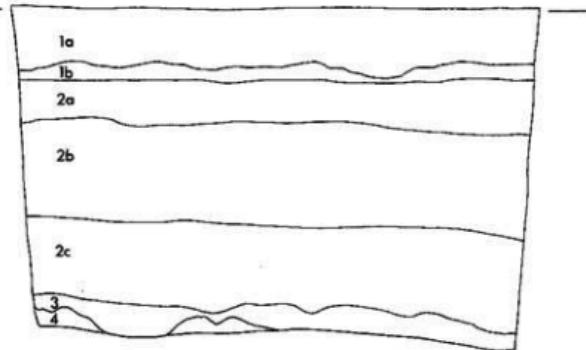
今回の調査は、遺跡の範囲を確認することを目的とし、任意に2m×2mの試掘坑を遺跡全体に設定し、地山のローム層まで掘り下げることにした。試掘坑は278ヶ所に設定し、このうち遺物はほとんどすべてのトレンチから出土している。しかし、大半が耕土からの出土で、包含層が認められたのは1～53、61～64、259～263トレンチと第5次調査のa～eトレンチである。上野神社の東側一帯に良好な包含層が存在していることが判明した。台地上でも角川に面した部分が遺跡の中心部と考えられる。



第2図 調査対象地図 (1/7500)

過去の発掘調査、分布調査において、遺跡の範囲は約50万m<sup>2</sup>と考えられている。しかし、それは遺物の分布範囲であり、遺構は約5000m<sup>2</sup>ほどの狭い範囲に集中している可能性が高くなつた。第3・4次調査は遺跡の北辺を通る北陸自動車道の予定地のほぼ全面を発掘したが確認された遺構は土塁一基のみであり、他に住居跡等は発見されていない。周辺部の遺物の分布の意味するところに興味が持たれる。

74.55m



第3図 第51トレンチ東壁土層図 (1/20)

### III 層序と遺構

#### 1. 層序

調査対象面積が広大なため、各トレンチによって層序は大きく異なる。基本層序は第1層の耕作土、第2層の黒色土(遺物包含層)、第3層の漸移層、第4層の黄褐色ローム層と続く。一般に早月川に近い南側では黒色土が薄く、角川に面した北東部では黒色土が厚い。遺物包含層が良好に残存している上野神社南側では1m近い黒色土が堆積している。図示した層序図は51トレンチの東壁である。

1a層……耕作土=暗褐色土、1b層……暗黃褐色粘質土=床土、2a……黒褐色土(明)、2b層……黒褐色土(暗)、2c層……暗褐色土、3層……灰褐色土=漸移層、4層……黄褐色粘質土=ローム層

遺物は1a層から2c層まで出土しているが、1a・1b層出土の遺物はかなり磨滅・細片化している。2a~2c層出土の遺物は1層出土のものに比べると大きなものが多いが、それでも大半が破片となっており、一つの層から複数の土器型式が出土している。

調査実施地区の標高は約70~80mを測る。

#### 2. 遺構

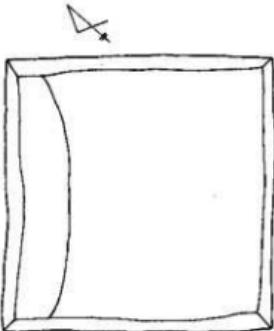
調査方法が試掘のため $2 \times 2$ mとい狭いトレンチ調査である。そのため遺構の確認は非常に困難である。明確な遺構としては住居跡が2棟確認されたのみである。その他に住居跡と思われる遺構が2ヶ所から発見されている。

住01は第21トレンチ北側でプランの一部を確認した。第4層黄褐色土上面まで掘り下げた段階

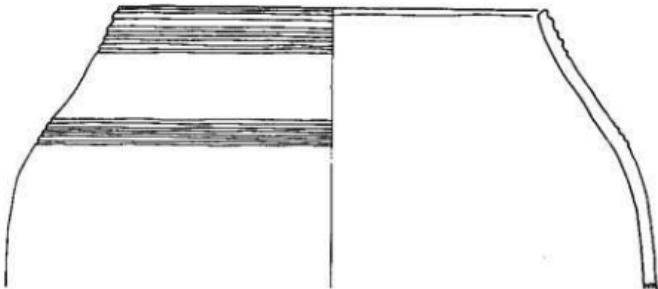
でようやく住居跡と併明したが、試掘調査のため覆土の発掘はおこなわず、そのまま埋めもどした。

覆土上面から縄文時代晚期の土器が一個体分出土しており、住居跡も縄文時代晚期のものと考えてよいと思われる。

第21トレンチからは第1層・2a層を中心に多数の土器片が出土しているが、住居跡覆土からは図示した土器1点のみである。住居跡覆土出土の土器は、口径約30cm、胴部最大径約46cmの大型品である。外面は丁寧に研磨されており、赤褐色を呈する精製土器である。胴部にはスヌの付着がみられる。



第4図 住01平面図 (1/40)



第5図 住01出土土器 (1/4)

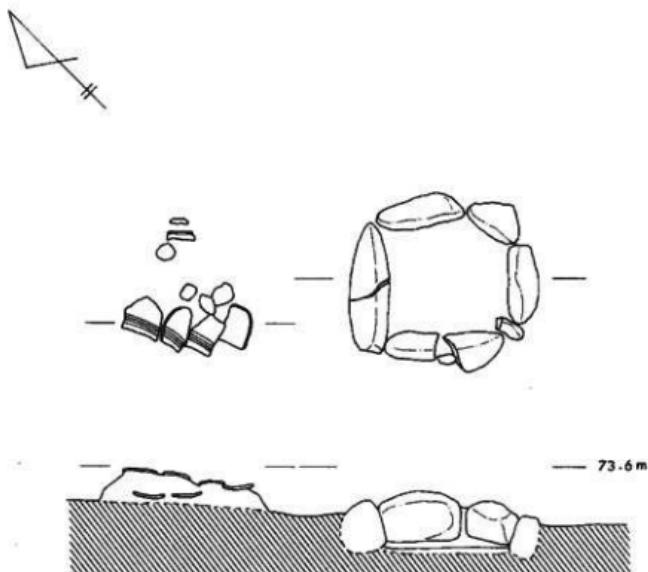
住02は第45トレンチで発見された。黄褐色土まで掘り下げたところ炉跡が検出され、住居跡であることが判明した。トレンチのほぼ中央部に5個の石を使つた1辺約50cmの正方形の石組炉が存在しており、床面に一個体の土器が倒れている。トレンチ内には柱穴と考えられるビットは発見されていない。

炉跡は床面を約10cm掘り下げて5個の扁平礫を埋めて作られている。炉石のうち大型の2個は熱のためかほぼ中央で2つに割れている。炉内では灰・炭化物・焼土はほとんどなく、わずかに底の部分が焼けているにすぎない。住居の廃絶の際、炉内の灰・炭化物等はかたずけられたものと思われる。

床面は第4層黄褐色土層を掘り込まれて設けられており、やや堅く踏まれている。

第45トレンチの層位は上から第1a層=耕作土、第1a層=床土、第2a層黒褐色土、第2b層暗褐色土の順で、各層から縄文土器が出土している。第2b層と第2a層の一部は住居跡の覆土とみなすことができる。特に2b層からは大型の破片やほぼ完形の土器が出土している。

出土遺物は土器石器がコンテナ約3杯分に達しているが、ほとんど縄文時代中期後半のものであ



第6図 住 02 平 面 図 (1/1)

る。特に古串田新式、串田新I式のものが主体を占める。数点ではあるが氣屋式、前田式の後期のものも出土しているが2a層より上位からである。

このほかに第7トレンチ、第28トレンチは土器の出土状態から住居跡の可能性が高いと思われる。

他のトレンチからは遺構らしきものは発見されていない。第42~44トレンチでは遺構は確認されていないが、多量の土器が出土しており、何らかの遺構内に含まれている可能性がある。ただし土器は、大半が破片となっており、廃棄された状態を示しているが、時期的には中期中葉~後葉を中心に晩期までのものが混在している。

## IV 出 土 遺 物

今回の試掘調査では、コンテナ約40箱分の遺物が出土している。遺物は調査対象地区のほぼ全域から出土しているが、大半は耕作土からの出土で細片と化している。出土遺物は大部分が縄文土器で、石器・上製品・須恵器・土師器・珠洲焼等が含まれている。

遺物の整理はようやく水洗・記名が終った段階であり、復元・実測等はその途についたばかりである。

ここでは、各トレンチの中から遺物包含層が良好に残存し、遺構も検出されている上野神社東側一帯のトレンチから出土した主な遺物を任意に抽出して図化した。また、遺物を最も多く出土した第42・43・44のトレンチ出土の土器は主なものを見版4~16に示した。

### 1 縄文土器

出土遺物の主体を占めるのは縄文土器である。過去における発掘調査では、中期前葉の新崎式から晩期後葉の下野式までの土器が出土しているが、今回の調査ではこのほかに数点ではあるが中期初頭の新保式の土器片（図版4 左上）が出土している。

縄文土器の中でも特に量が多いのは中期の上器であり、中葉の天神山式・古府式・古串田新式・後葉の串田新I式が多くみられる。前葉の新崎式、後葉の串田新II式、前田式は量的にはやや少ない。前田式では微隆起線文の土器の脇部破片（第10図21）が数点みられる。

後期では氣屋式、加曾利B I式、井の口I式、井の口II式などが存在するが、いずれも量的には少ない。

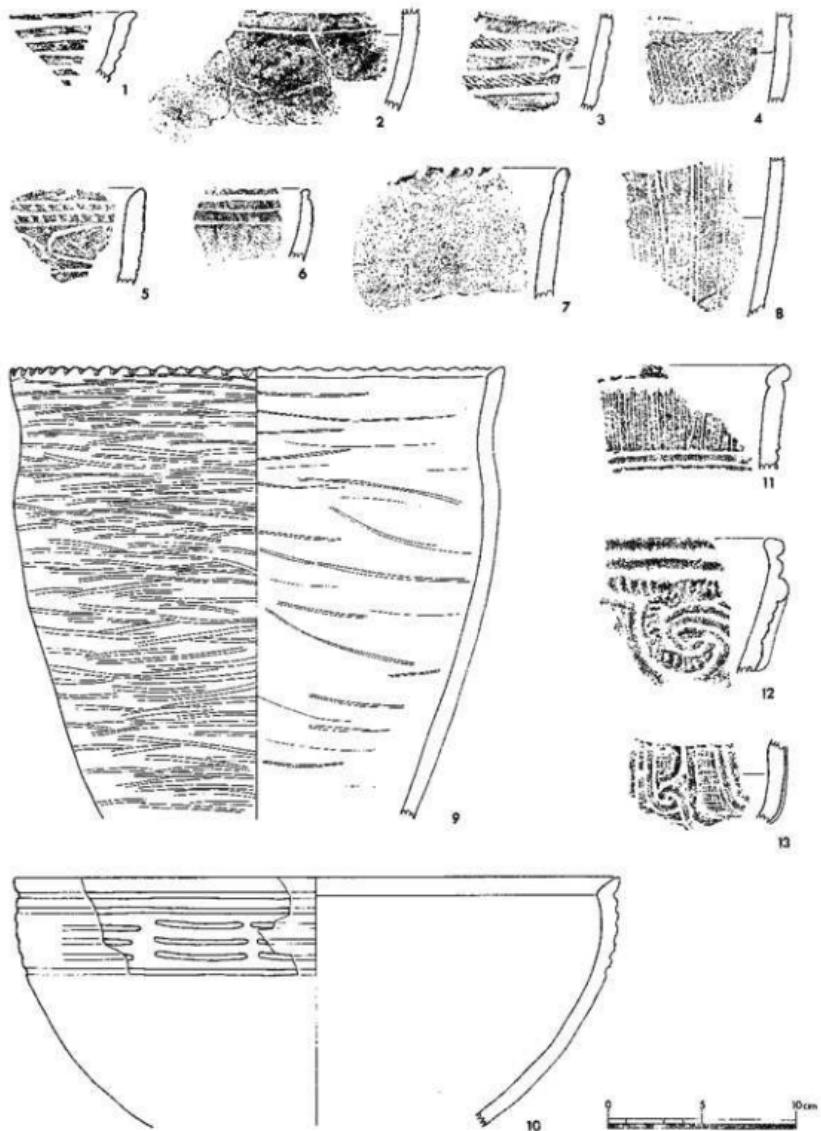
晩期では図示できなかったが、前葉から後葉まで各期の土器が出土している。その中では後葉のものが多いようである（第15図13など）。器形の復元できるものは時期の特定しにくい条痕の粗製土器が多い。

出土した土器からは、早月上野遺跡は中期初頭に出現し、中期中葉にピークをむかえ、中期末から後期前葉に一時衰退するが、その後、晩期後葉まで連続と続いているといえる。しかし、各時期で地点の移動がみられ、第45トレンチでは中期中葉から後期前葉まで、第11トレンチでは後期中葉から晩期後葉までといったように、各トレンチで出土土器の時期的な片寄りがみられる。しかしながら移動の範囲は狭いものである。

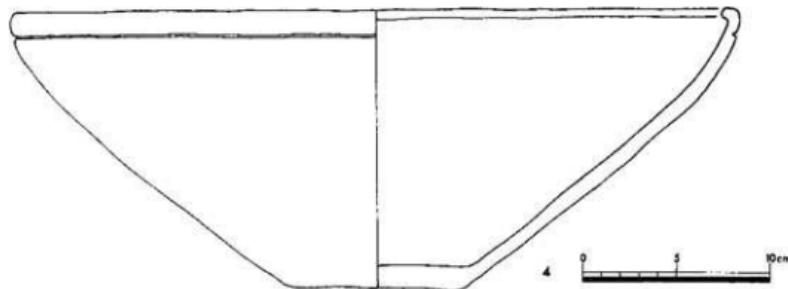
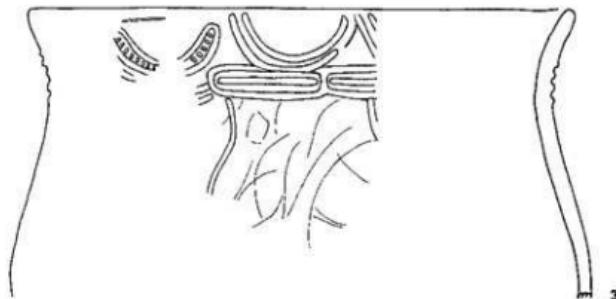
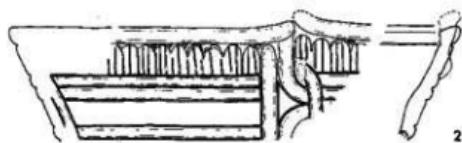
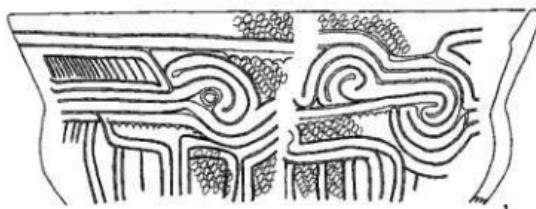
出土した土器は大半が北陸地方の土器型式を示しているが、一部他地域の特徴を示すものが含まれている。第11図16は信州系の土器である。口縁部上半は意図的に丁寧に削られており、口唇部の破片は存在しない。住02の覆土下部からの出土で、第12図1・3・4、第13図5などが共伴している。

図版10右上、同右下に示した土器はいわゆる大木系の土器である。いずれも口縁部破片である。第42~44トレンチからの出土で、古府式~串田新I式土器の破片と混在した状態で出土している。

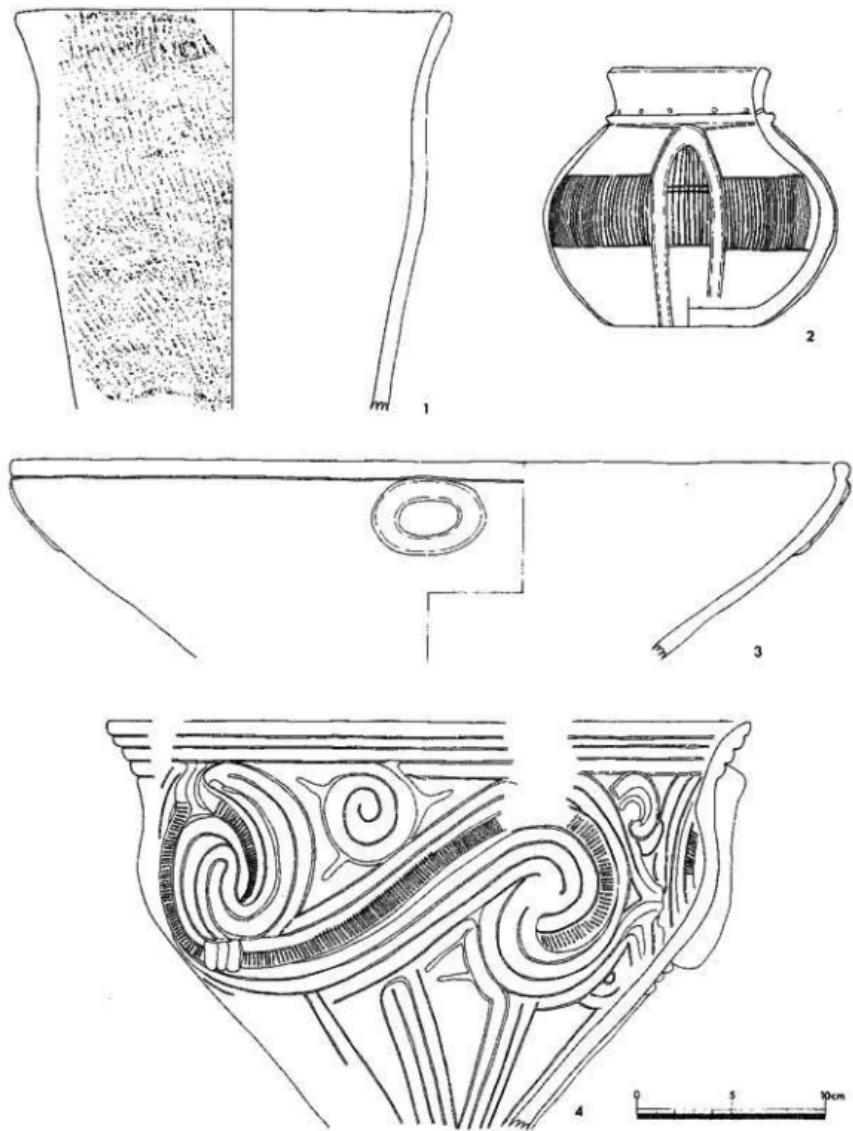
大木系・曾利系の土器の出土した遺跡としては、魚津市内では大光寺遺跡が知られている。



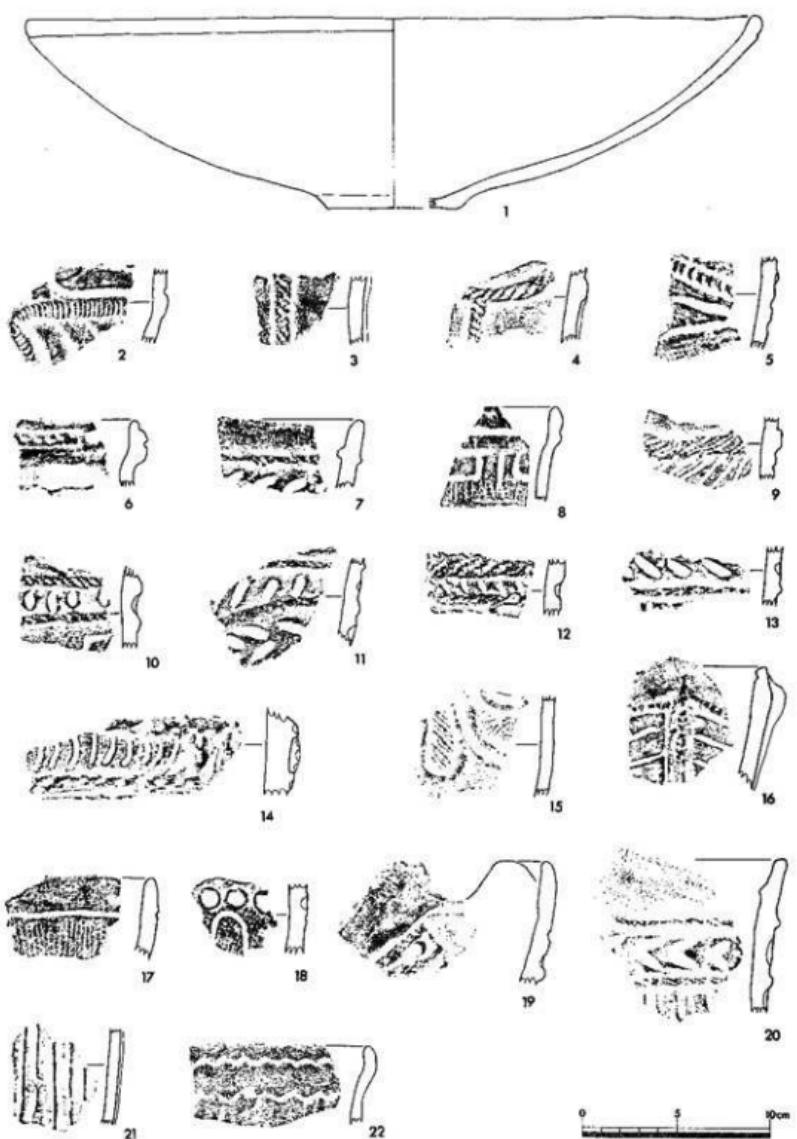
第7図 1-2第5トレンチ 3第3トレンチ 4-10第7トレンチ 11-13第9トレンチ 出土



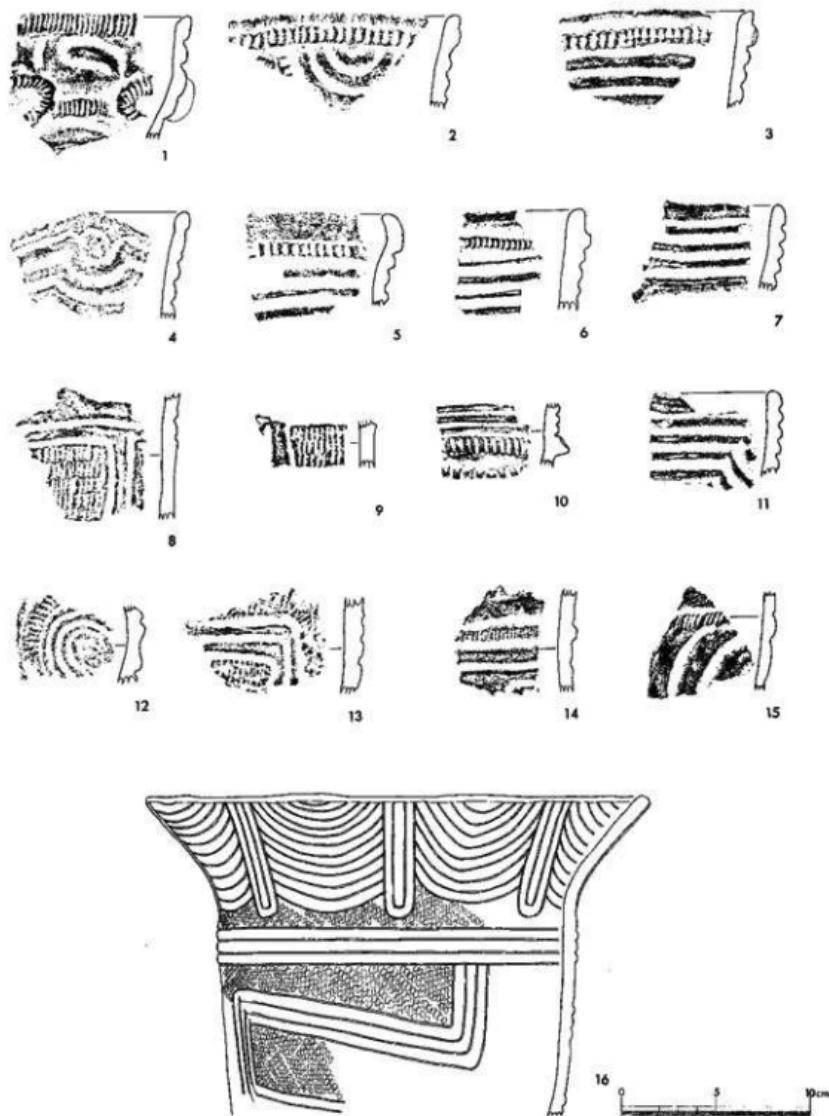
第8図 第43トレンチ出土土器



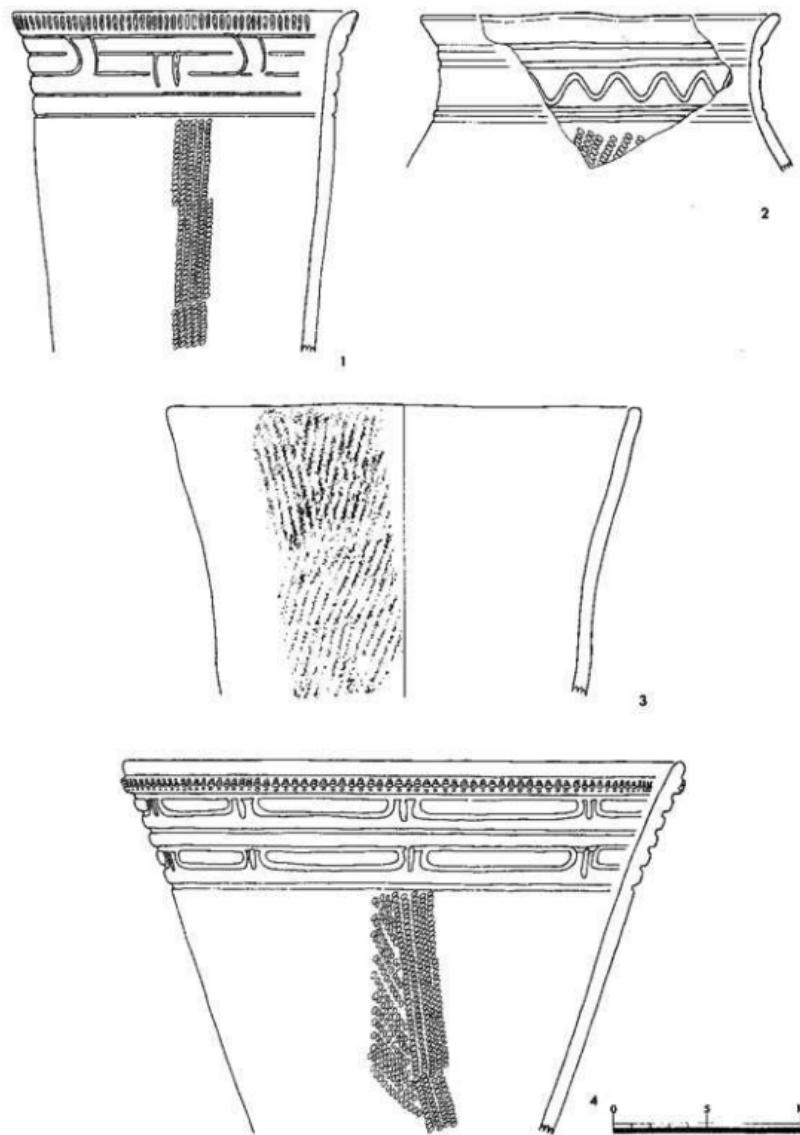
第9図 第44トレンチ出土土器



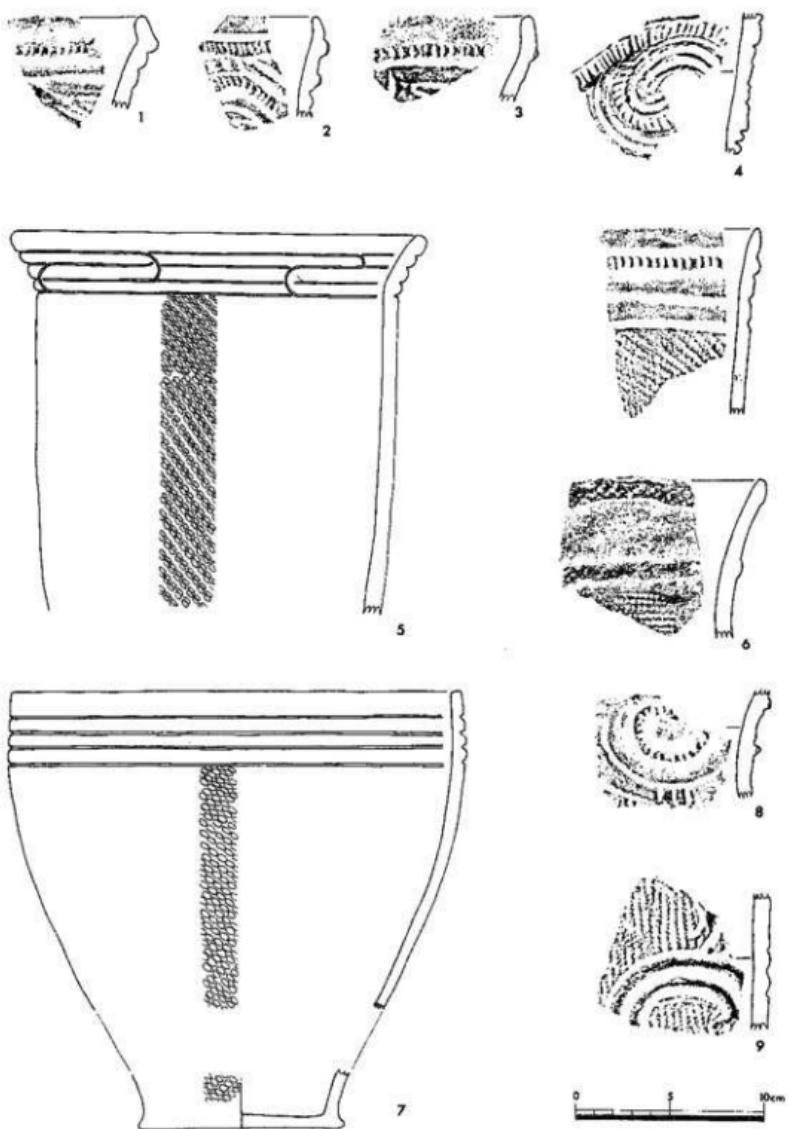
第10図 1.第42トレンチ 2-22第45トレンチ出土



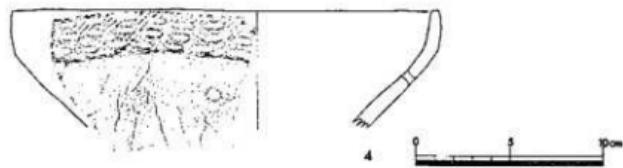
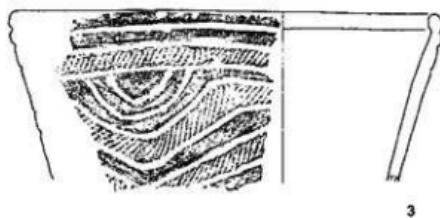
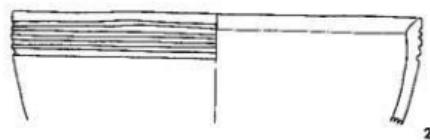
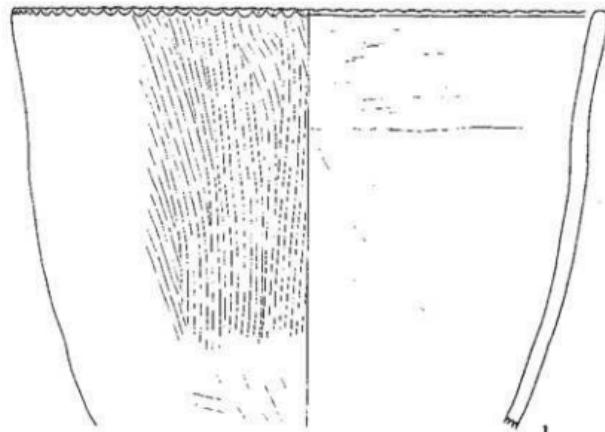
第11図 第45トレンチ出土土器



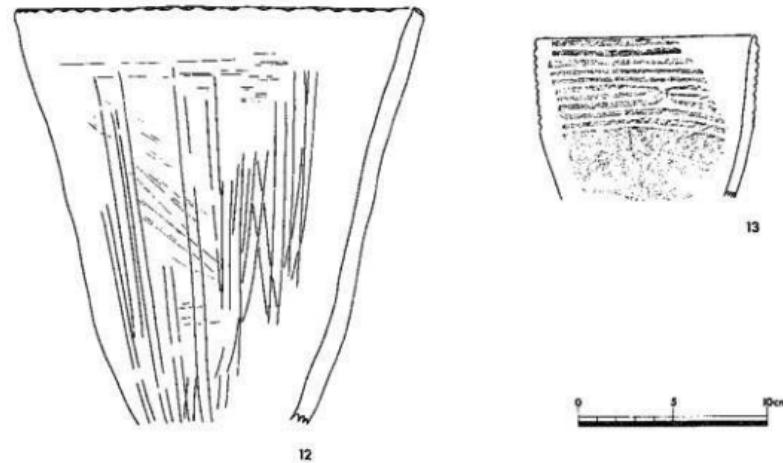
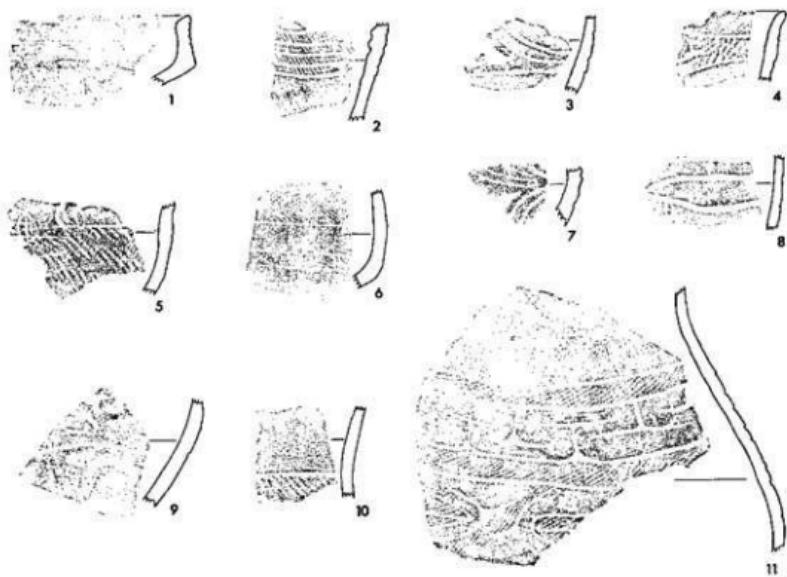
第12図 第45トレンチ出土土器



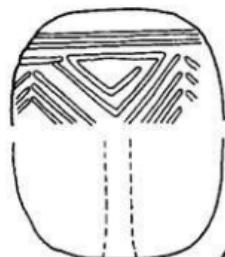
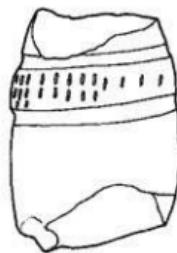
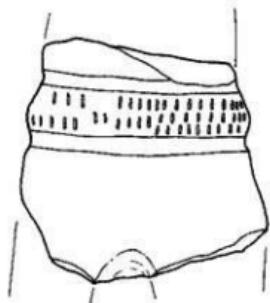
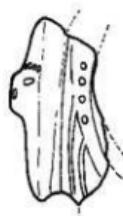
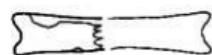
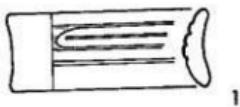
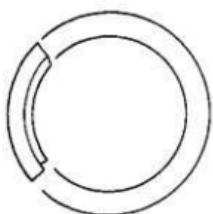
第13図 第45トレンチ出土器（7は住居跡・床面出土）



第14図 1 a トレンチ 2・3第48トレンチ 4 第49トレンチ出土



第15図 1-11 第11トレンチ 12・13 第28トレンチ



第16図 土 製 品

## 2 石 器

今回の調査で出土した石器の内訳は次のとおりである。生産用具として、打製石斧39点、磨製石斧21点、石鎌8点、石匙1点、石鍤15点、石皿2点、叩石2点、凹石3点となっている。非生産用具としては石棒2点、石劍・石刀6点、石冠2点、玉類3点がある。これらの石器のうち時期を特定できるものは出土状態からみてほとんどない。

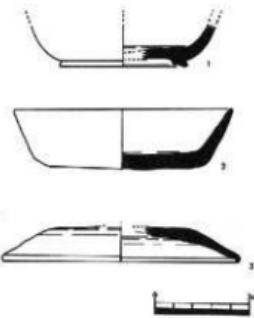
これらの石器の中で注目されるのは1点出土している石匙である。この石匙はつまみの部分に炭化した纖維が付着しており、つまみの部分に紐のようなものがまかれていたことを示している(図版20 左下)。

石器組成は、打製石斧が主体を占めている。この点は、北陸地方(富山県以西)の縄文時代中期～晩期の石器的一般的なあり方である。しかしながら、第3・4次調査で早月上野遺跡の縁辺部を発掘しているが、その時の石器組成とは若干の差異がみとめられる。第3・4次調査の際に出土した石器は、生産用具では打製石斧85点、磨製石斧 118点、石鎌2点、石鍤24点、石匙1点、スクレイパー16点、石皿1点、叩石1点、砥石2点の内訳となっている。打製石斧・磨製石斧と石鎌の比率がやや変化している。これは、集落の中心部と縁辺部といった遺跡内での場の違いを表わしているものと思われる。

## 3 須恵器・土師器



第18回 鉄 津



第17回 須恵器 1 (1トレンチ) 2 (263トレンチ) 3 (263トレンチ)

第1～8トレンチ、第259～263トレンチからは縄文時代の遺物に混って奈良・平安時代の須恵器・土師器が出土している。いずれも小破片が多く、図示できるものは須恵器3点にすぎない。須恵器では杯・杯蓋、土師器では杯が出土しているが、両者とも甕などの大型の器種は出土していない。須恵器類の出土地区はいずれもスーパー農道に近い地点である。第1・2次調査ではスーパー農道建設予定地から奈良・平安時代の遺構と遺物が出土しており、奈良・平安時代の遺跡の範囲はスーパー農道の周辺に限られているといえる。

なお、第2トレンチより鉄滓が出土しているが、須恵器の破片も出土しており、奈良・平安時

代のものと思われる。魚津市内では初での出土である。

#### 4 土 製 品

土製品としては、滑車形耳飾3点、土偶2点、有孔球状土製品8点が出土している。

滑車形耳飾はいずれもbトレンチから出土している(第16図1~3)。1は復元径5.2cm、厚さ2.2cmの環状である。内面に横円工字文が施されている。2は径5.4cm、厚さ1.1cm、中央部に十字形の文様を施している。赤色顔料の痕跡もみとめられる。3は完形で径3.8cm、厚さ1.5cm。表面には4単位の浮線文が施され、中央には突起がある。赤色顔料が塗布されている。

土偶は頭部(第16図4)と胴部(同5)がある。有孔球状土製品は図示した1点(第16図6)のみが有文で、他は無文である。

### V ま と め

今回の調査の結果、早月上野遺跡の縄文時代の集落の中心部を確認することができた。縄文時代では中期初頭から晩期末まで連続する点や、面積の広さなど県下でも有数の遺跡であるといえる。試掘調査のデータをもとに、魚津市教育委員会・魚津市土地改良区・魚津農地林務事務所の3者で協議を重ね、遺跡の中心部(第19図の範囲)は全面盛土によって保存することに決定した。関係者の協力に深く感謝します。

今後の圃場整備も魚津市教育委員会・魚津市土地改良区・魚津農地林務事務所の密接な連絡のもとに実施されることになっている。

### 文 献

- 魚津市教育委員会 1967 「大光寺遺跡報告書」  
" 1971 「魚津市石垣遺跡発掘調査報告書」  
" 1981 「富山県魚津市佐伯遺跡」  
" 1982 「富山県魚津市早月上野遺跡」—北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書I—  
富山県教育委員会 1975 「富山県魚津市早月上野遺跡第1次緊急発掘調査概報」  
" 1976 「富山県魚津市早月上野遺跡第2次緊急発掘調査概報」  
" 1979 a 「富山県魚津市佐伯遺跡発掘調査概要」  
" 1979 b 「富山県ほ場整備関連事業埋蔵文化財発掘調査概要」  
" 1982 「北陸自動車道遺跡調査報告」魚津市編



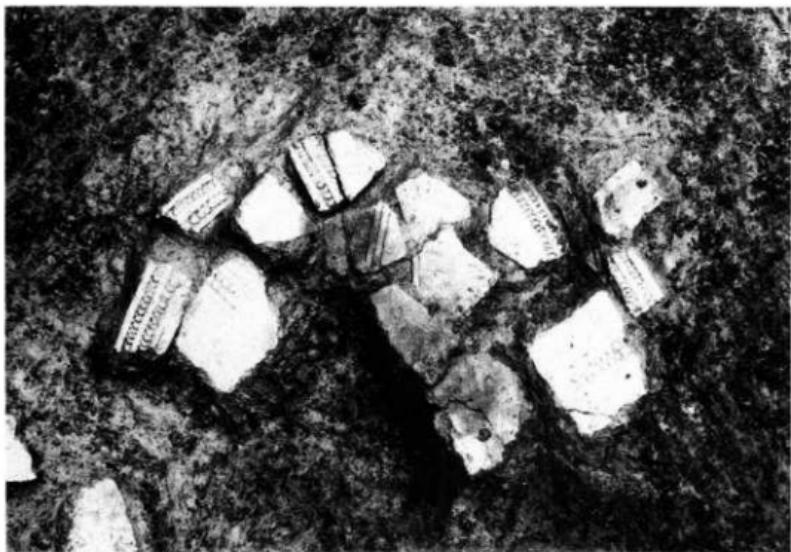
第19図 調査地区トレンチ配置図 (1/1,500)



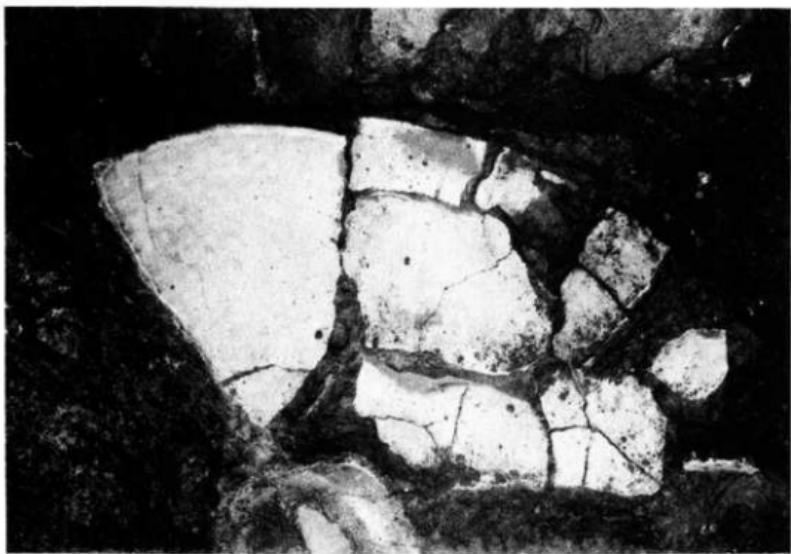
試掘状況



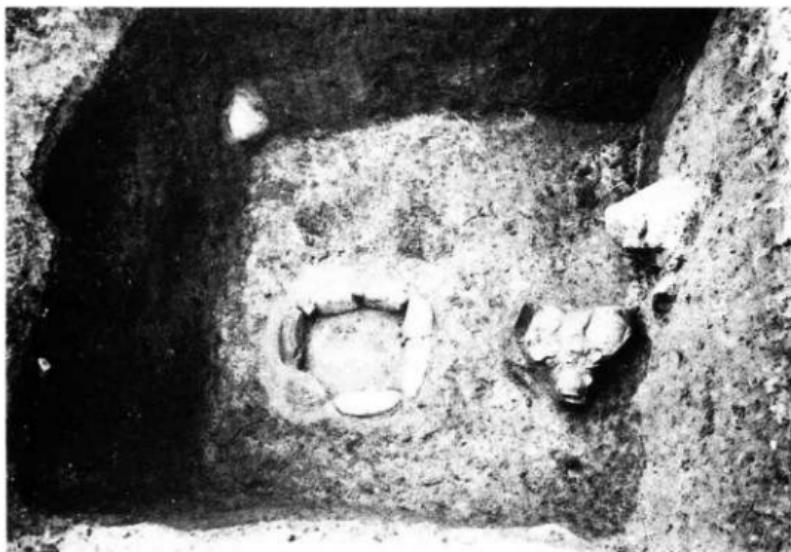
調査風景



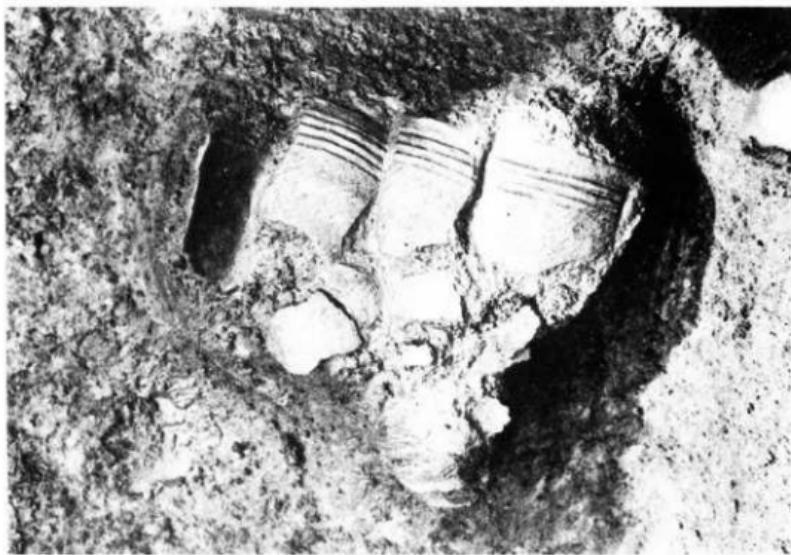
土器出土状態 43トレンチ



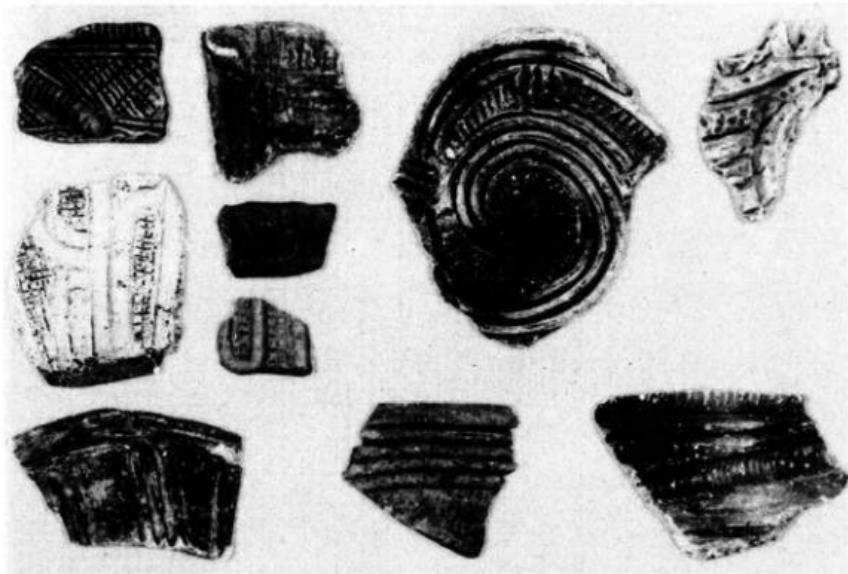
土器出土状態 42トレンチ



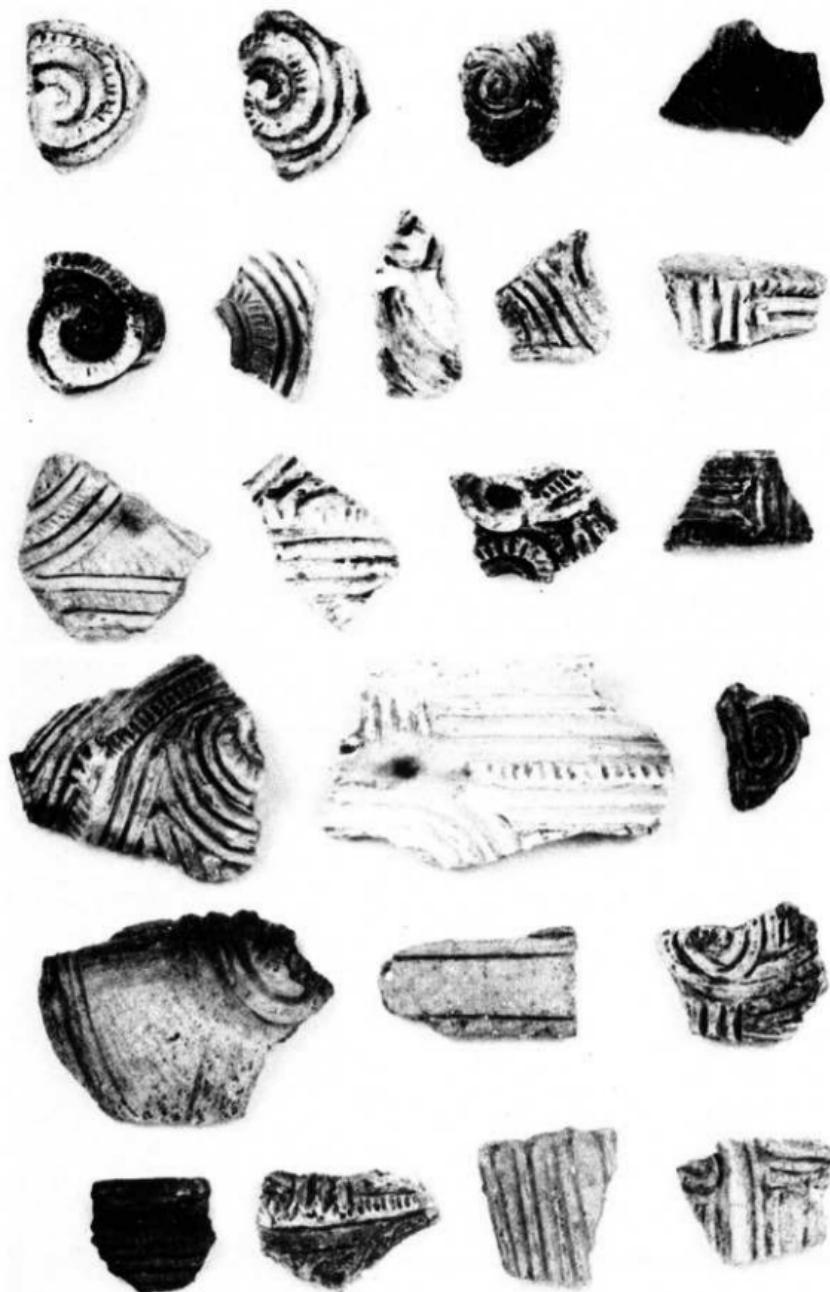
住居跡 45トレンチ



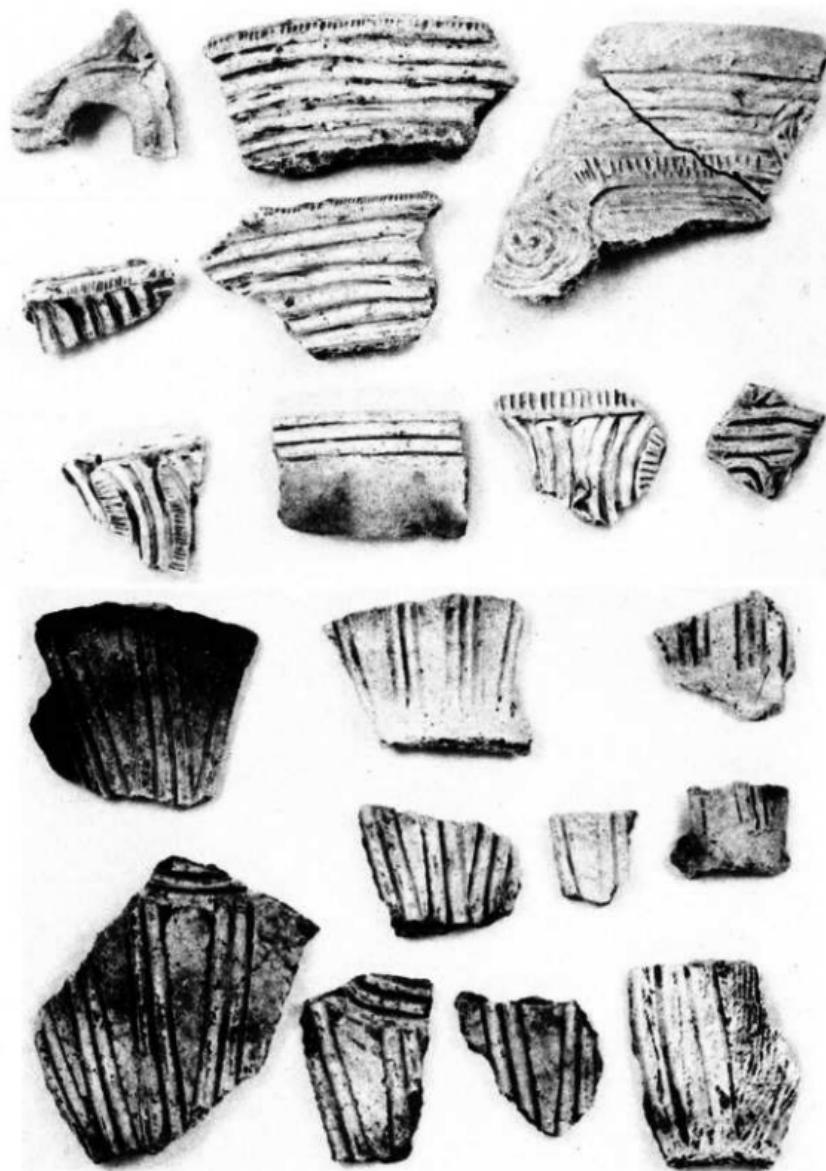
住居跡床面出土土器



第42・43・44トレンチ



第42・43・44トレンチ



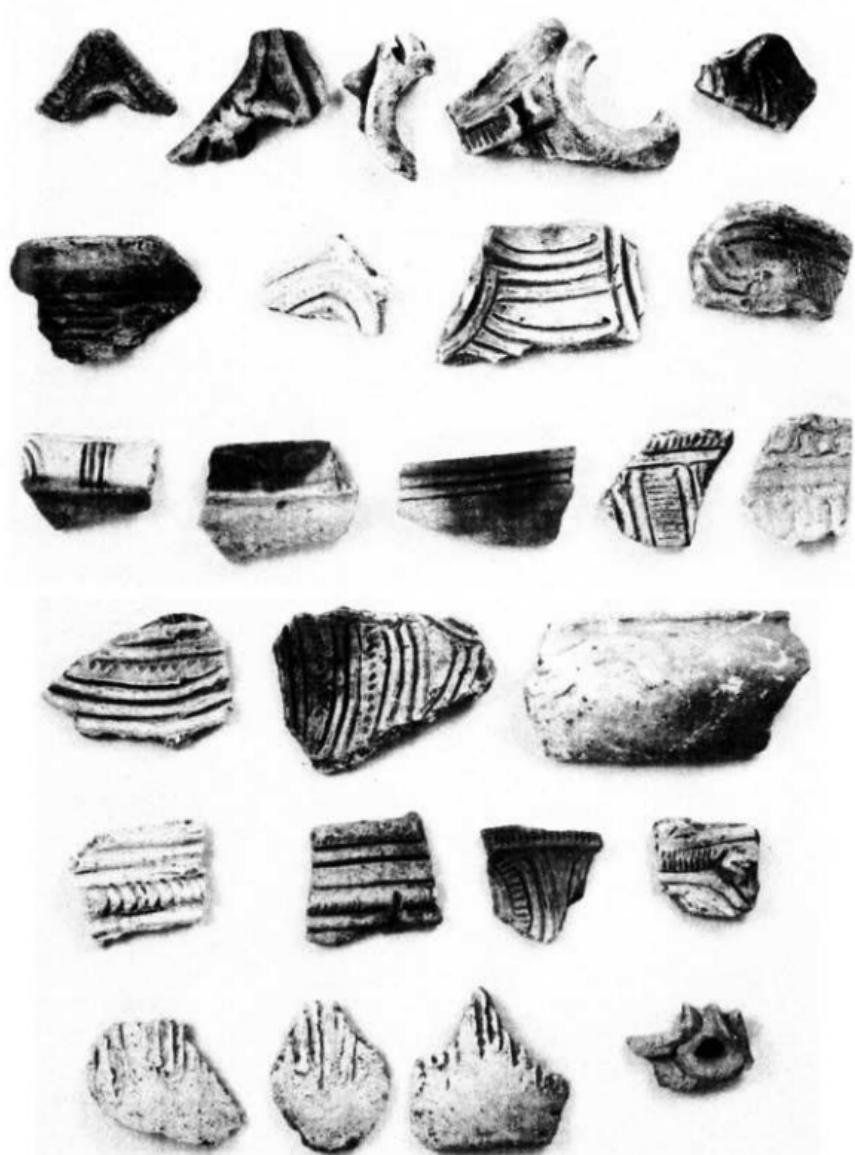
第42・43・44トレンチ



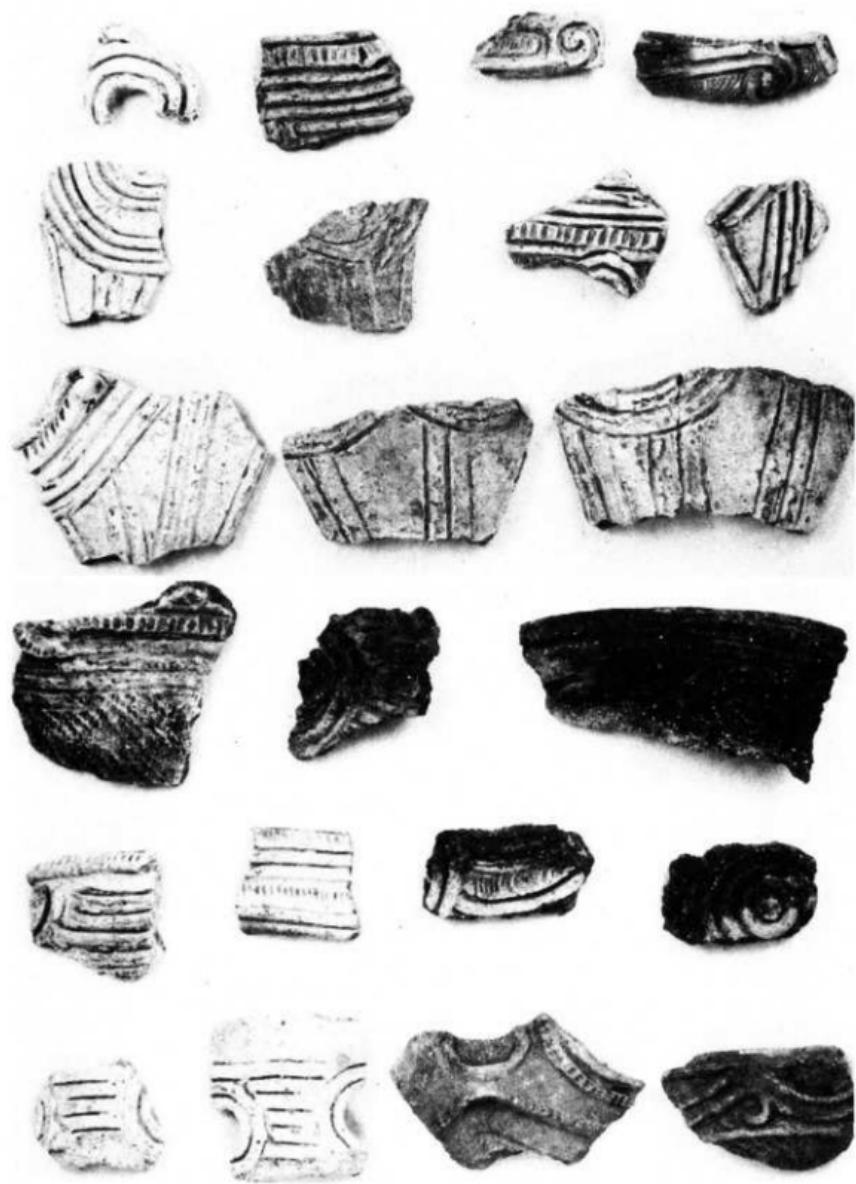
第42・43・44トレンチ



第42・43・44 レンチ



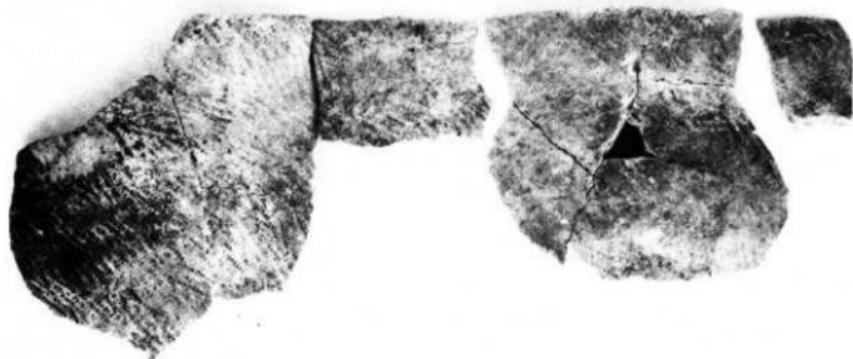
第42・43・44トレンチ



第42・43・44 レンチ



第43・44トレンチ



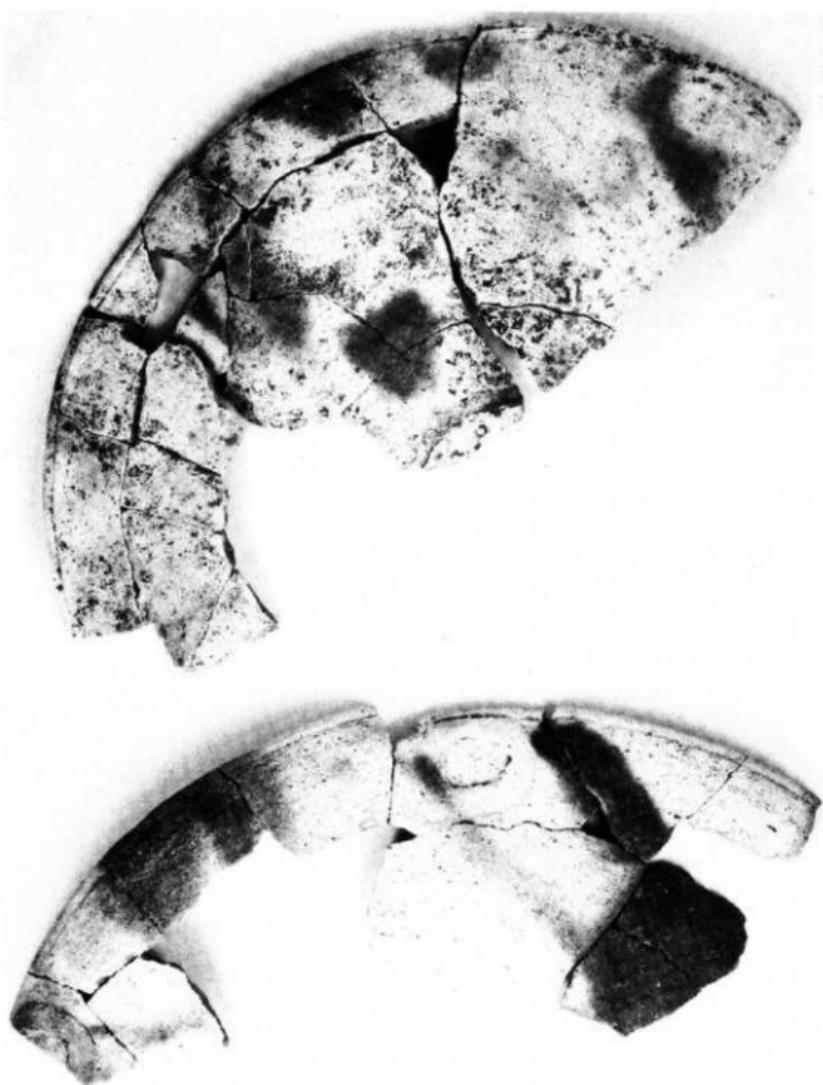
第43 トレンチ



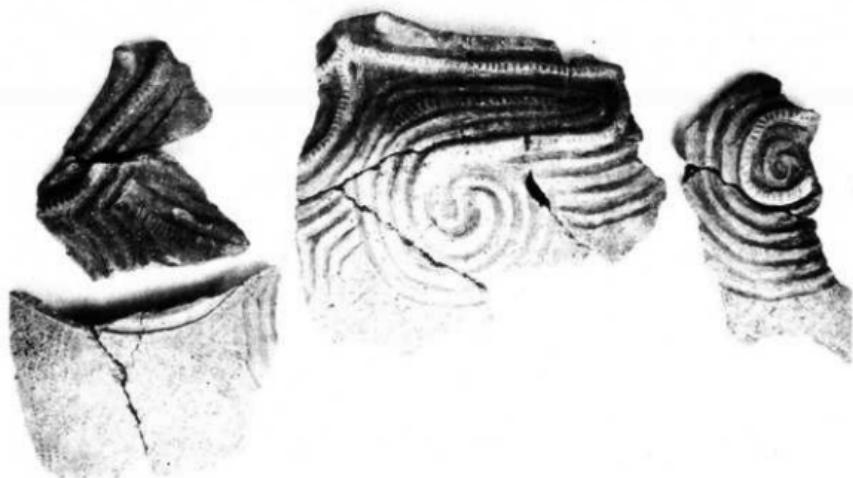
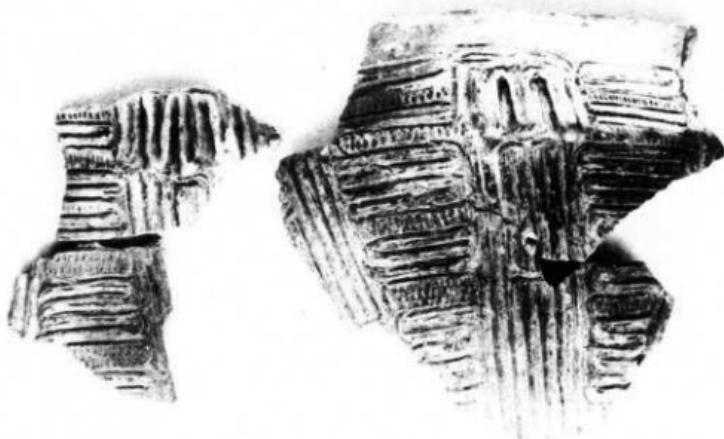
上第43トレンチ 下第42トレンチ



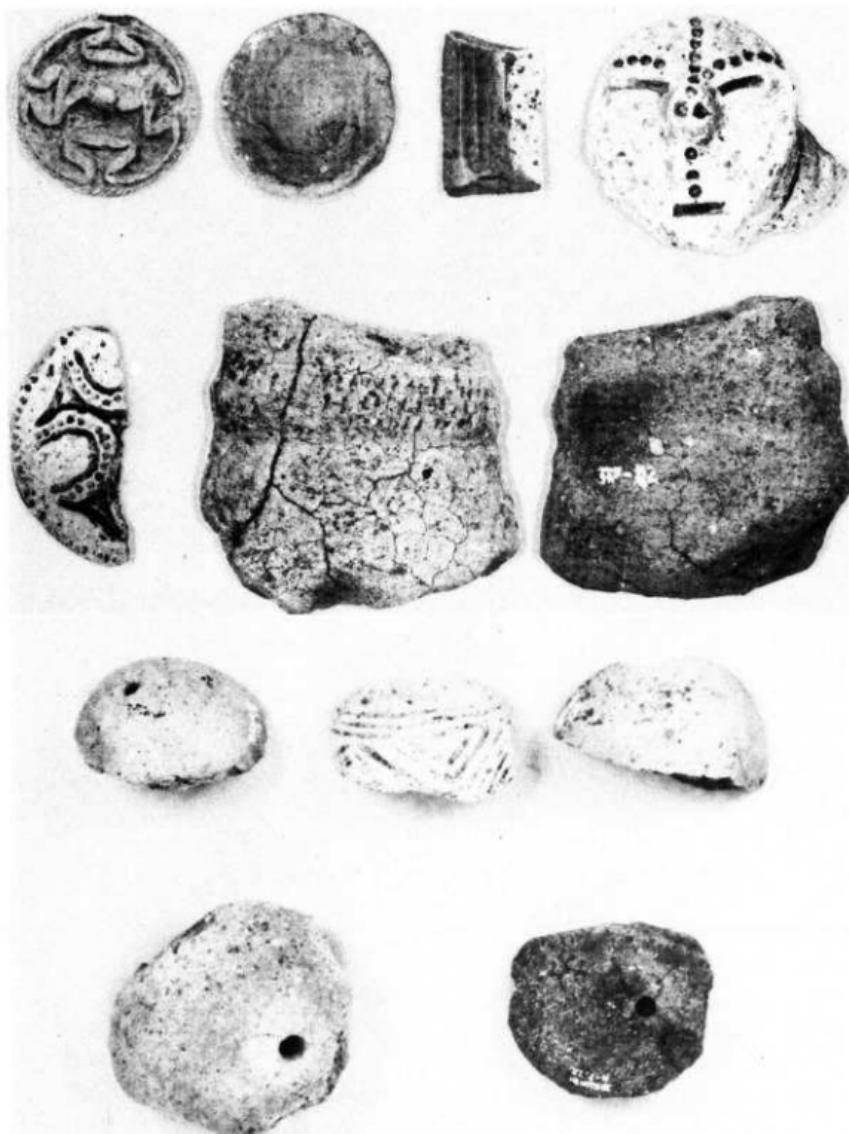
第43トレンチ



上第42トレンチ 下第44トレンチ



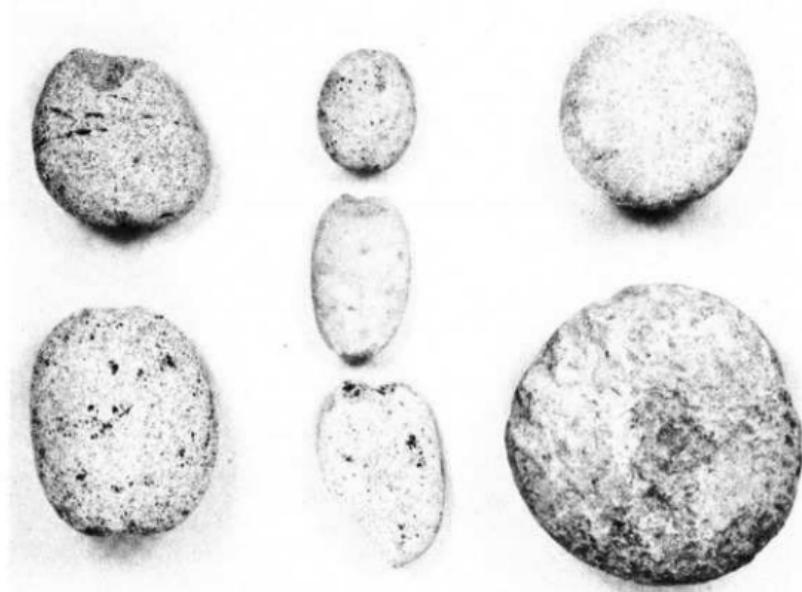
第44トレンチ



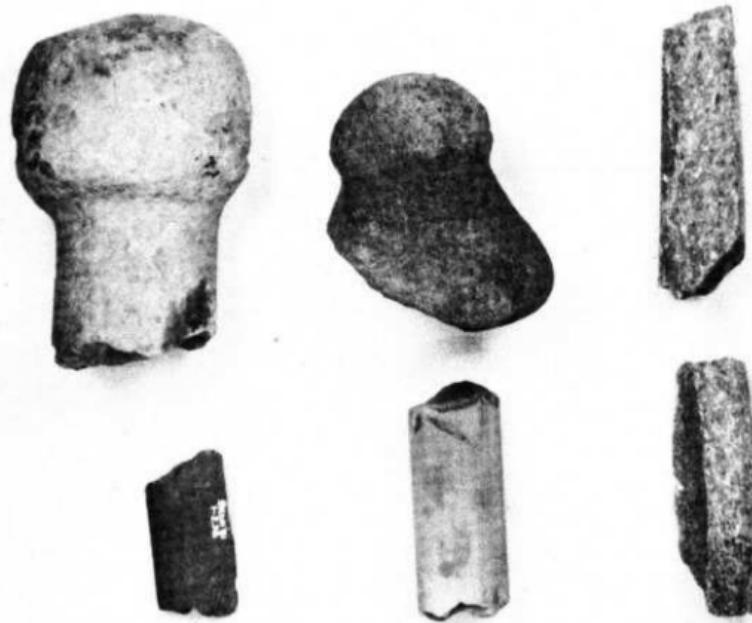
土 製 品



打製石斧



上、磨製石行 下、石錘・凹石



上、石棒・石冠・石劍 下、石匙・石鑊

魚津市埋蔵文化財調査報告書第11集  
富山県魚津市  
早月上野遺跡  
(第5・6次調査概要)

昭和58年3月31日 発行  
発行 魚津市教育委員会  
〒937 魚津市駅前堂1-10-1  
印刷 三和印刷株式会社